

# 茅ふきたより

巻頭インタビュー

技術が伝え継ぐ「心地よさ」は、厳しい修業が裏打ちしてくれる

田中正光さん 茅葺き師

奈良県天理市山田町生まれ 81歳  
山田萱葺業四代目



▲奈良県御杖村 安能寺現場にて

も く じ

- 01 巻頭インタビュー 田中正光さん
- 02 第7回茅葺きフォーラム戸隠大会報告
- 05 活動紹介 古民家族
- 06 会員からの報告 草原シンポジウムに参加して

08 イベント情報

第8回茅葺きフォーラム北上大会

葺き師の仕事を知りたいのは、昭和25年頃やった。終戦のどん底の時分で、14か15歳や。親父はまだ戦地から戻らないので、親父の二番弟子に仕事を習ったんやが、これが軍隊式の厳しい修業でしたわ。それでも仕事は忙しかった。戦争で男手のない集落が大半で、家数はあるのですが、近隣には屋根を葺ける人がほとんどいない。

朝4時頃にね、子どもを連れて女の人が戸を叩くんです。「家に雨が漏って大変なんで、何とか早く直してほしい」と。それで行くと、ワラ葺き屋根で天井が抜け落ちてしまつてる。あちこち雨漏りや、タライや皿にオヒツまで並べて。寝る場所もないほど大変な状態でした。自分はまだ見習いやつたけど、それを見て、がぜん仕事をやる気になりましたわ。

当時は自転車で出かけました。まだ長靴がないので、イノシシの皮で作った、今のブーツみたいなのを現場で履いていました。これが温かで、雨や雪でも滑らない毛並びでね。作業着は、母親が縫ってくれた「どんさ、じんべ」というのを着ました。雨が降ると「みの」を着けて。

道具は自分で作りました。タタキは、茅の木口が割れないように、ワラ縄を編んで巻く。材料が傷まないように、いろいろ工夫してね。それで、仕事に出ると3カ月ほど家には帰れないんです。次々に頼まれて、時には仕事をしている家から次の家へ、自

転車や道具箱だけ先に運ばれてしまうことも。宿も近くにないので、ほとんど他人の家に泊めてもらうんです、その頃は。これまでの仕事では、社寺を含めて全国の方々に屋根を葺いてきましたが、奈良の屋根は贅沢で見栄えがよく、蛇腹もきれいに感じていますね。

伊勢神宮の仕事では、とくに屋根の水処理に関して葺き厚が極端にある場合、雨水が下から軒裏にまわらないように、茅の勾配を立てて葺くのがコツなのですが、これなども見落としがちな技の一つですね。もちろん屋根全体を葺くときには、しっかりと空気が通えるように「押しほこ」で留める加減など、まったく厳しい修業から得た判断力と勘が頼りのものですわ。今は孫の貴也(25)と順也(25)も一緒に屋根に上がっているのですが、かわいいで教える厳しさがゆるくなつて難儀しとります。

近年は屋根に金属覆いをする家も多いのですが、今も頑として被せない古くからのお客さんで友人でもある医者には、「風邪をひくと、茅が菌を吸ってくれる」といいます。茅葺き屋根全体に空気が通っていて、「住んでいると、日々こころがやすまって、ほっとする」と。息子さんも、もちろん茅葺きの家が大好きで、嬉しいことですよ。

(聞き手 坂本善昭)

## 会からの報告

## 第7回茅葺きフォーラム

「信州戸隠 高距御師集落と茅葺き」  
長野県長野市戸隠大会

長野県長野市戸隠にて、「信州戸隠

高距御師集落と茅葺き」をテーマに平成28年6月17日・18日に第7回茅葺きフォーラムを開催した。会場は戸隠神社中社社殿近くの戸隠観光情報センター。全国20都府県から150名が集まった。

当協会の安藤邦廣代表理事の開会挨拶、長野市の近藤守教育長と戸隠観光協会の極意憲雄代表理事の歓迎の挨拶の後、元長野県立歴史館総合情報課長の宮下健司氏よりご講演いただき、平安時代から山岳修験道の一大霊場として、現在まで脈々と受け継がれている戸隠の歴史がひもとかれた。

続く第1セッションでは「信州戸隠の茅葺き」として、開催地より4名の事例発表の後、当協会の米山淳一理事をコーディネーターとして会場からの質疑応答を交えながらパネルディスカッションを行った。戸隠を中心に長野市の歴史的風致、その課題、戸隠の集落と民家とその特徴、生活文化とこれから、茅葺きの技について、茅葺きを軸に様々な分野から

発表があり、短い時間の中で濃密な情報が提供され、戸隠について理解を深めた。さらに第2セッションでは「各地からの報告」として、千曲市の矢島氏より国の名勝、重要な文化的景観に選定されている嫉捨の棚田と長楽寺の茅葺き建築について紹介があった。次に正会員の長谷川順一氏より、平成26年11月22日に発生した長野県神城断層地震の被災地で建物と文化財の両方を支援救出する活動の報告があった。最後に塩澤実理事より、平成27年(2015年)9月に開催された国際茅葺き協会スウェーデン大会の報告があり、茅葺きを取り巻く状況、課題について、日本だけではなく世界の中の茅葺きについても知ることが出来た。



▲茅葺きフォーラム

## 講演 宮下健司

## 「高距御師集落としての中社・宝光社」

戸隠は平安時代の末から山岳信仰の場所として開かれ、中世も山岳信仰で開けてきた。その後、御師集落として成立していく江戸時代を中心に話が進められた。衆徒(院坊・御師家)はそれぞれの院坊の跡継ぎとして弟子(山伏)を抱え、指揮指導していた。江戸時代の戸隠は山岳密教寺院として、本院(奥院)、中院、宝光院の三院が一体となつて年中仏事や神事を行う山岳寺院となった。三院衆徒は祈禱等の宗教活動を行い、中院、宝光院の門前には衆徒とともに職人集団や門前百姓が定住した。その衆徒と門前百姓が分離して、御師(社家)と在家に分化し、門前集落が正徳年間(1611~17)頃に形成された。この二つの集団が江戸時代に成立して現在もこれらが集落を支えているというのは全国的にも希有な例ではないか。

江戸時代中期から御師の活動が活発化し、各地に檀那場を組織し、記録では8万人を越える檀那(戸隠講)があった。明治元年に明治新政府の神仏分離政策によって、衆徒は還俗し、戸隠山頭光寺を廃して、戸隠神社が発足した。江戸時代までは戸隠山頭光寺の御師であり、明治以降は戸隠神社へ奉仕し祭祀に関わる聚長(神官・社家)となった。

中社・宝光社は、戸隠山の麓にある仏教寺院である戸隠山頭光寺の中院、宝光院の門前に計画的につくられた宗教集落・信仰集落である。

奥院 標高1356m  
中院 標高1200m

宝光院 標高1100m

全国の信仰集落と比較しても、飛び抜けて標高が高く、戸隠は高距限界の地である。これらを表し、「高距御師集落」と定義したい。

## 第1セッション 開催地報告

## 塚原秀之「開催地紹介 戸隠伝統的建造物群保存地区へ」

長野市では、善光寺周辺地の善光寺御開帳、戸隠地域の戸隠神社の式年大祭、松代地域の松代城下町、若穂川田地域の街道と川田宿、鬼無里地域の白髯神社と祭祀や諏訪神社の御柱祭など、これら地域固有の「歴史」「文化」を活かしたまちづくりを推進している。

戸隠の町並みの魅力は、社殿を基点とした近世の町割りが良好に残り、この町割りの中に、「寄棟造・茅葺屋根・せがい造」を典型例とする伝統的建築物が多く残る。現在も36家の宿坊があり、大規模で構造・意匠に優れた伝統的な宿坊建築が多く残る。信仰に関わる石造物や、屋敷地を区画する石垣・生垣などの工作物・環境物が特有の町並みを形成してい

る。こうした歴史的な町並みのなかに、戸隠信仰・祭礼、戸隠そば、竹細工など特有の文化・伝統が生き続け、人々が営みを継続している。

直面する課題として、昭和30年代以降の急激な観光地化による町並みの変化および都市部への人口流出と少子高齢化（合併後10年間で人口が1割減少）がある。

伝統的建造物群保存地区（文化財課）と、街なみ環境整備事業（まちづくり推進課）とが連携し、さらに住民主体のまちづくりを目指している。

### 吉澤政己「戸隠の集落と民家とその特徴」

平成19年にNPO信州伝統的建造物保存技術研究会が実施した景観重要建造物等基礎調査によると、戸隠地域には伝統的な建物が314棟あり、茅葺は鉄板被覆を含むと255棟であった。この茅葺の中には、平屋で軒をせがいで造る形式、中二階を出梁造でせり出す形式の建物があり、技法的にも意匠的にも優れた建物が数多くみられた。また、養蚕の影響か中二階の前面をはね上げた屋根とする形式の建物も相当数あった。中社・宝光社の宿坊は、規模が大きく、二階が発達した茅葺がほとんどであった。

宿坊（社家）の建築事例として極意家住宅が紹介された。極意家は、戸隠神社中社社殿に最も近い位置にある宿坊で、

近世には徳善院と称した。建物配置は、間口6間半、奥行5間の奇棟造、茅葺き客殿と間口11間、奥行7間半の入母屋造、茅葺き二階の庫裏からなる。戸隠神社中社の宿坊として貴重な遺構である。

### 徳武洋友「戸隠の生活文化、活動、これから」

子供の頃（昭和20年代〜30年代）は、ほとんどの家々は茅葺き屋根であった。自分の住む中社地区は、越水ヶ原に広大な茅場を所有していた。毎年10月30日の茅刈りには、全ての家から老若男女を問わず出て茅を刈り取り、それが毎年2戸の葺き替えに割り当てられた。宿坊を除くと、竹細工と炭焼き、農業によって生計を立てていた。昭和38年の村営スキー場が開設されて以降、通年観光地へとシフトしていき、茅葺き家屋は減少の一途をたどり、茅場もその役割を終えてうっそうとした雑木林となった。15年程前にまだ残る貴重な家々、まち並みを残し、景観を整備し、後世につなげていこうと有志が立ち上がったが、理解を得られず頓挫していた。3年前から行政の力強い後押しで重要伝統的建造物群保存地区にむけて動き出したことは大きな喜びであった。これらの建物やまち並みを共有の宝として、訪れる人にも心地よく、地域住民が誇りを持って住めるまち、若者たちが住みたくなるまちをつくっていく

ことが更なる戸隠観光の発展に欠かせないと思っている。

### 松澤敬夫「信州の茅葺きの技」

茅葺きは越後高田葺きとして信州・越後・上州地方に住み込み、今日に技術を伝えてきた歴史がはつきり屋根の型で受け継がれている。屋根葺きは集落全員で結という形で行い、棟梁も何人も村内に春来て秋帰っていった。技術もそれぞれ競い合い、進歩に繋がりが、60年で葺替えるまで持たせてきた。一代に一回の総葺替えであった。

クリ、ナラ、ケヤキを用いたサスは、本サス、負いサスに分けて荷重を分散、棟はかんざしといいい垂木を逆木に使う、軒は縄取り・膝押しでの2つの材を垂木に取り付ける。麻殻の軒付から平葺き、島田編、土俵締め、シコロなど棟納めまでコガヤ（カリヤス）の豪雪地域での屋根葺き技術を紹介。

### 第2セツシヨン 各地からの報告

#### 矢島宏雄「姨捨の棚田と茅葺き」

姨捨の棚田は、平成11年5月に国の名勝に指定、平成22年2月に国の重要な文化的景観に選定された。我が国で初めて文化的財指定を受けた農耕地、棚田が織りなす文化的景観である。古くから月見の名所・棄老説話で有名な姨捨地区（標高460〜560m）の斜面には、千曲川や善光寺平と呼ばれる広大な盆地を臨んで、約1500枚の棚田が展開している。現在みる棚田は、代々この地の人びとが耕作してきた結果であり、耕作の継続なくして、棚田景観の保全はできない。

名勝「姨捨（田毎の月）」指定地長楽寺地区は、更級川を挟み、天台宗の寺院の姨捨山放光院長楽寺がある。現在、長楽寺には本堂はじめ月見堂・観音堂・月見殿があり、本堂の板葺きを除き茅葺きである。名勝保存整備事業（平成14〜23年度）において、歴史的環境整備を目的に鉄板葺きの屋根を建築当初の茅葺きに修理を行った。

長谷川順一「白馬小谷の茅葺き民家——震災被災の現場で見たこと——」  
2014年11月22日に起こった長野県神城断層地震。高齢化、過疎化、地域から人が抜けていくことを恐れている状況がある中、震災後の対応を誤れば、むしろ20年、30年の変化が加速してしまうことを中越地震の経験から危惧していた。これまでも応急被災度判定「危険」即解体されるなど多くの建物が壊されていた。震災後6日目から小谷村、白馬村を中心に被災家屋の修復相談会を開いた。12月3日から雪が降り始めた。村では帰るための家をつぶしてはならないと被災家屋の応急処置など獅子奮迅の動きをしており、そのサポートをしていた。被災地は塩の道の街道沿い、人と物と文化の

交流が多様な地域であり、個々の建物をみていくうちに、地域の文化、地域性が色濃く残っている地域だということもわかってきた。いよいよ春から建物が取り壊されるといふとき、史料救援ネットを立ち上げた。古いものがあらためられることなく消えていっていいのだろうかというのが活動の原点。建造物・史料、そして仏像・彫刻の3分野が連携し、のべ300名が被災地にかけつけ1年間で64棟の民家、土蔵の調査を行った。

指定、登録されている文化財だけ守ればいいのか。そのすそ野にある未指定で文化的価値の検証評価を受けていない建造物とそこに秘められた歴史の痕跡や史料が受け継がれることを願う。

### 塩澤実「国際茅葺き協会ITSスウェーデン大会報告」

国際茅葺き協会ITSには、オランダ、デンマーク、スウェーデン、イギリス、ドイツ、南アフリカ、日本の七カ国が加盟している。

総会では、各国の代表から、事業として茅葺きを行っていく上での問題点や今後の展望などが発表された。環境、持続可能な開発、気候の緩和に対して、茅葺きが貢献しているというのがおおむね共通していたが、オランダではプラスチック製の茅の導入が茅葺き屋根の品質向上につながるなど、各国のお国柄の

うかがえる興味深いものであった。

スウェーデン、デンマークの茅葺きを巡った。かつての漁村で今はサマーハウスや週末住宅として利用が人気があると茅葺き集落。世界で最も古い野外博物館のひとつであるコペンハーゲンの野外博物館には、40haもの敷地にデンマーク文化圏各地から移築された民家を中心とした80棟を超える歴史的建造物がある。感心したのは様々な地域や時代に基づく多様な建築材料が、オリジナルに忠実に修復が重ねられており、それがこの敷地内で自給されていることであった。ゴッドランド島でかつて行われていたセッジ葺きを再現するワークシヨップも行われた。ヨーロッパの茅葺きという現代建築に葺かれたり、新しい技術や材料を開発したりと先進的な印象があったが、野外博物館のような場所が伝統的な文化を継承する場として、建物だけではなく行為を保存し、そこに込められた想いを伝える努力が為されていることで、文化財が迷った時に立ち返る指標として意味を持ち、新しいことをする時には思い切ったチャレンジが為されるようになるのかもしれない。日本の野外博物館も建物を剥製として並べるだけではなく、その建物を成り立たせている生活文化や価値観や人の生き方を伝えるものであってほしい。

(文責 上野弥智代)

## 第7回茅葺きフォーラム 見学会



▲戸隠神社奥社随神門にて



▲中社 極意家



▲宝光社 越志家の葺き替え現場 説明 小谷屋根松澤敬夫さん



▲宝光社 武井家

## 活動紹介

学生古民家再生団体「古民家族」

“楽しく学ぶ”をモットーに

武庫川女子大学

古民家族(こみんかぞく)

「古民家族」とは、兵庫県西宮市の北部、山口町船坂において、推定築年数一八〇二〇〇年の古民家を武庫川女子大学の学生が主体となり、修復・復元を行っている団体です。楽しく、学ぶ”をモットーに、月に一・二回の活動において、修繕工程の中で、自分たちの手で実際に触って、見て、体験しながら伝統文化や、日本の建築様式を学んでいます。

この活動は、幸運なきっかけ、偶然の連続で実現しました。武庫川女子大学四回生の生徒が古材の研究をしたいと古材問屋さんを訪れたこと、同時期に船坂古民家の有効活用の依頼が古材問屋さんに来ていたこと、加えて専門知識をもつ知識者の方と出会えたことが重なり、その交流の中で活動が開始しました。その後、知識者の方と材料提供をいただく古材問屋さんの協力の下、活動が二〇〇六年に本格化しました。

私たちの活動は、現在で十年目を迎えています。十年間の活動の背景には一般ボランティアの方も含め、多くの方との“縁”があります。それらの“縁”のおかげで、茅葺き職人さんに出会うこと



▲屋根下地の修復



▲屋根葺き

ができ、茅葺き屋根の修復作業が始まりました。

古民家族年に1度、一週間ほどの日程をとり職人の方々からのご指導の下、学生自身が自分の地下足袋を履き、茅葺き屋根に上がり作業をする”茅葺きウィーク”が二〇〇九年に始まりました。毎年、学生や一般ボランティアの方々で年明けの活動で刈った材料を使用し、少しずつ葺き替えを続けてきました。古民家再生を始め、八年が経った二〇一五年八月に1棟の古民家の茅葺き屋根を葺き上げることができました。今年、二〇一六年から船坂にある別の古民家の茅葺き屋根にも着手し、指導をいただきながら学生自身で屋根の下地から修復を開始しています。自分達が刈った材料で、少しずつ自分達の手を使い作業を行うという人生にとって貴重な経験をさせていただいています。

室内の修復においては、囲炉裏や、床板の設置、三和土を作るなどを行ってきました。二〇一六年度は“おくどさん”の設置を行い、日本に少なくなってきたいる、おくどさんを作ることができる職人さんに来ていただき、使用する土を学生の足で練ったり、土台を組んだりして、四月から三カ月かけ六月に完成させることができました。七月には実際に使用してみようということで、釜でご飯を炊き使用しました。囲炉裏も、忘年会などで



▲8年かかって少しずつ茅葺き屋根を葺き上げた



▲おくどさん

鍋を作り活用しています。自分が作業をして、完成したものを自分たちで使ってみる、当時のものを復元し、経験してみることができるとも古民家の良さです。

茅葺古民家は、屋根・壁・柱・梁などすべてが再利用できるエコ住宅であり、地震に対応できる伝統的な造りを持ちます。このように古民家再生活動は、学生として新しいことを学ぶ私たちに古くからの素晴らしい知識を教えてくださいます。エコ住宅（茅葺古民家）を再生する作業の中で、私たちもエコ活動を行っています。解体作業で出る建築廃材を極力少なくするため、徹底的なごみの分別を行い、様々なアイデアでゴミを減らし、廃材の一部を新築物件の材料として使用するといい試みを行いました。古材の中には五〇〇年以上前、室町時代の材木である可能性が高い材料なども存在し、古くても本当に良いものは何度でも使用できるといふことを知り、学生の多くは古材の魅力を実際に肌で感じる事が出来ています。

茅葺古民家が解体され続けている今、古民家を再生していくためにはその地域の方々の理解と協力が重要です。古民家族においても今後、地元の方々と交流を深め、共に活動を行っていくことを目標とし、活動していきます。

## 会員からの報告

### 第11回全国草原サミット・シンポジウムin上山高原に参加して 塩澤 実

2016年10月、湯村温泉と松葉が二で有名な兵庫県新温泉町にて開催された、第11回全国草原サミット・シンポジウムin上山高原に参加して来ました。

初日はまず上山高原の見学会。初めて訪ねる山頂草原に至る細い車道を登って行くと「旧草原界」という標識が。しかし周辺はミズナラの森に覆われており、かつて周辺集落共有の採草放牧地として使われて来た上山高原が、和牛飼育の目的が使役牛から肉用牛と変わり、放牧から畜舎での飼育へと移る中で、利用されなくなりかなり縮小してしまっている事を伺わせます。

それでも、稜線上に出た途端に広がる30haを越える草原は、秋晴れの空の下で一面に銀波輝く見渡すかぎりのスキ原の景観を成し、尾花越しに日本海を望む眺望と相まってすばらしい開放感。NPO法人上山高原エコミュージアム、上山高原自然再生協議会の皆さんによる解説によると、人の手が入らなくなり一度は荒れてしまった草原を、人の手により再生しつつあるとのこと。現在でも春先

の火入れが行われることにより草原植生の維持が図られていますが、放牧や飼料としての採草という需要の低下に代わって、茅材として出荷することも検討されているとのことでした。実際に少し丈が短いもの、お持ち帰りしたくなる程に茅として品質の良いスキが繁茂していました。

鳥取県と接し中国山地の東端を成す上山高原は1000m級の山々に連なり、貴重なイヌワシなど大型猛禽類の狩り場としても非常に重要との事で、茅としての草原の利用と草原生態系や景観の保全が組み合わさって行くことを願います。

2日目のシンポジウムでは基調講演と各地からの実践報告の後、分科会に別れて討議されたテーマのひとつに「茅葺き文化の継承のための茅場の保全・再生」が取り上げられ、兵庫県立人と自然の博物館の橋本佳延先生とともに、こちらの進行を仰せつかって来ました。

はじめに茅葺きを取り巻く現状として、まず農業の変化による飼料、肥料としての草資源の利用が停止して、採草活動が滞る事で屋根用の茅の不足に陥り、材料不足による茅葺き職人の離職と後継者減を招き、絶対数の不足から職人の担う役割分担の増加が単価の上昇をもたらした経緯を私からご説明した上で、パネリストとして茅葺き職人の相良育弥（淡



▲上山高原



▲上山高原

河かやぶき屋根保存会くさかんむり」と三木宏衣祐（但馬茅葺）、茅材屋さんの長田友和（富士勇和産業）、行政から橋詰清孝（神戸市教育委員会）の各氏から、現場での実情と想いを語って頂きました。

講演者の皆さんの生きた報告に会場からの意見も合わさり、茅葺き文化の持続性を担保するために茅の供給態勢の仕組みをどうつくっていくのか？についてはある程度議論が深まったと思うのですが、せっかく草原の保全に取り組む方々が多く出席して下さっている機会にしては、草原保全における茅葺き文化との連携について、用法と効能を具体的に詳らかにするには至らなかった点について、自分の進行の拙さを悔いる結果ともなりました。

最終的には橋本先生がまとめて下さり全体会への報告となりましたが、茅の利用と生物多様性の保全は密接している以上、お互いに出来る事から手を繋ぐ輪をもっと広げて行くためにも、今後も草原というキーワードとの関わりを密にして行かねばと思いを新たに3日間でした。

最終日は全国草原サミットとして草原を抱える各地の首長さんたちが集い、議論の上で以下の「第11回全国草原サミット宣言」を採択して幕を下ろしました。



▲上山高原で草原の保全再生活動の解説に耳を傾ける



▲参加者に茅葺きの道具を紹介する相良育弥



▲上山高原のススキ草原に咲くリンドウ

一、草原の保全や活動に関わる人材を掘り起こし育成し、活動の理解者、応援者を増やします。  
 一、草原を持続的に活用するスモールビジネスを地域と共に創出します。  
 一、草原の保全と持続的利用に関する地域住民や行政、企業との連携を推進します。  
 一、草原の保全活動に関わる地域間での情報交換や学び合いを促進します。

宣言の謳う大きな輪の広がりの中に、茅葺きという文化も生き続けて行きたいものです。



▲平成26年長浜大会にて息子さんと



平成28年10月7日に本会正会員である小林茅葺屋根屋の小林勝洋さん（茨城県日立市）が逝去されました。74歳でした。謹んでお悔やみ申し上げますとともに心よりご冥福をお祈りいたします。

おくやみ

## 第8回茅葺きフォーラム 「これからの民家園を考える」

主催 / 日本茅葺き文化協会 共催 / 北上市 北上市教育委員会

日 時：2017年6月17日(土)～6月18日(日)  
 会 場：○フォーラム・総会：みちのく民俗村・展勝地レストハウス(岩手県北上市立花14)  
 ○情報交換会：みちのく民俗村  
 宿 泊：ホテルシティプラザ北上(岩手県北上市川岸1-14-1)  
 参加費：[資料費] 一般【2,000】円、会員・学生【1,000】円  
 [情報交換会費]【3,000】円(各地の飲みもの持ち込み大歓迎!)  
 [宿泊費]【7,500】円(税込・1泊朝食付)  
 [見学会費] Aコース(半日)【2,000】円 / Bコース(1日)【2,000】円(予定)(昼食代含む)

お申込み、お問合せ：日本茅葺き文化協会事務局  
 申込み締め切り：6月2日(金)

### 【6月17日(土)】

- 10:30 開場、受付開始
- 11:30 日本茅葺き文化協会総会
- 13:30 第8回茅葺きフォーラム
- 13:45 講演  
「世界の民家園」  
岸本章(多摩美術大学環境デザイン学科 教授)
- 14:45 「これからの民家園を考える」事例発表  
みちのく民俗村(岩手県北上市)  
遠野ふるさと村(岩手県遠野市)  
福島市民家園(福島県福島市)  
日本民家集落博物館(大阪府豊中市)  
長屋門公園(神奈川県横浜市)  
南部茅について(岩手県金ケ崎町)
- 16:45 「これからの民家園を考える」パネルディスカッション  
コーディネータ：米山淳一(地域遺産プロデューサー・日本茅葺き文化協会理事)  
パネリスト 岸本章、みちのく民俗村、遠野ふるさと村、福島市民家園、  
日本民家集落博物館、長屋門公園、岩手県金ケ崎町  
まとめ 安藤邦廣(日本茅葺き文化協会代表理事)
- 18:15 閉会
- 18:30～20:30 情報交換会

### 【6月18日(日)】

- 8:30～12:30 見学Aコース  
みちのく民俗村  
昼食
- 12:30 解散(希望者 JR北上駅送迎 到着13:00頃)
- 8:30～16:00 Bコース  
Aコース+毛越寺の常行堂および周辺の茅葺き民家
- 16:00 解散(希望者 JR一ノ関駅送迎 到着16:30頃)



▲デンマークの野外博物館



▲みちのく民俗村

### みちのく民俗村

みちのく民俗村は、北上川と和賀川の合流する市立公園展勝地内にある。谷合いと丘陵地約7haの敷地に、国重要文化財旧菅野家住宅など北上川流域とその周辺の茅葺き民家10棟ほか大正建築の名残をもつ旧黒沢尻高等学校校舎など19棟、合計29棟の建物を移築復元した東北有数の野外博物館である。

園内には南部藩と伊達藩の境塚が残り、村の環境復元も忠実に行われている。民家を保存しながら地域の歴史と暮らしを学ぶことのできる野外博物館として平成4年に整備された。

(編集後記)

各地で野焼きが行われて芽吹き  
 春、屋根葺きも始まり、初夏、茅葺き  
 フォーラムの頃にはぐんぐん成長し、  
 そして10月土用すぎには全国で茅刈り  
 が始まる。このあつという間の1年に  
 3mも成長し、青いときは動物の餌と  
 なり、枯れて刈り取られて屋根の材料  
 となり、腐ってなお肥料となり、また  
 春には地面から芽吹いてくる。草の力  
 はすごいなあとあらためて思う。(弥)

### 茅ふきたより 第17号

2017年5月31日発行(非売品)

発行：一般社団法人日本茅葺き文化協会  
 編集：茅ふきたより編集委員会  
 一般社団法人日本茅葺き文化協会  
 〒300-4231 茨城県つくば市北条184  
 TEL/FAX 029・867・5829  
 E-mail info@kayabun.or.jp  
 URL http://www.kayabun.or.jp

◎みなさんの情報をお寄せ下さい!

茅葺きについてさまざまな情報とご意見・ご要望をお待ちしております。

茅刈り、葺き替え情報大歓迎。事務局宛までお寄せ下さい。